建学の精神「真理はわれらを自由にする」と教育理念

西　村　　明

本年１月10日に３号館ホールにおいて、シンポジウム『「真理はわれらを自由にする」の100年』が開催され、学長として、今後、この建学の精神を教育の現場において如何に具体化するかということについて話すように求められたが、時間の関係もあり、十分に意を尽くすことができなかった。私は哲学者でもないし、この建学の精神を専門的に論ずることはできないが、教学の責任者として自ら考えを当然持つべきであり、たとえ未熟な考えであるとしても表明する必要があろうかと思い、この機会をかりてその一端を述べさせていただくことにした。もっとも、ここで述べていることは私個人の考えであり、学校法人別府大学を代表した意見ではないことをお断りしておかなければならない。

建学の精神について

まず、この建学の精神は、真理、われら、自由という３つの言葉から成り立っている。この３つの言葉をどのように理解し、それらをどのように関係づけ、一つの概念として捉えるかと言うことのなかに各人の思いが表されるように思われる。まず「真理」とは現実（自然的、社会的な客観）を正しく（科学的に）認識したものであり、その反対語はウソ、虚偽であり、現実を極めて主観的に捉えたものである。「われら」は私個人、われの複数であり、自分を含めて他者、或いはすべての人を指し、そして「自由」は何ものかの拘束から解き放され、自ら主体的・主導的に行動できる状態である。そこで、３者の関係を総合的に考えるならば、まず私個人ではなく、われわれが現実についての脅威・恐怖から自由になること、つまりわれわれが現実によって支配され、動きの取れない状況から解放され、現実を自ら支配できる状況になることがその意味するところであろう。そのためには、現実を正しく（科学的に）認識しなければ、現実を正しく制御できない。つまり、ウソ、偽りに惑わされるならば、さらにより大きな恐怖に脅かされることになる。結果として、自然と社会の動きに拘束・支配され、不自由になってしまうのである。

そこで、どうすれば現実を正しく認識できるのかと言えば、まさに「われら」の意味が生きてくるのである。現実という世界を個人が認識しようとしても仕切れるものでないし、たとえ認識したと言う人がいたとしたらそれはウソ・虚偽である。時代は絶えず変化し、世界は果てしなく広がっている。個人の認識はそれに比べればわずかな水滴に過ぎない。しかしながら、人間の歴

史はまさに個人的な認識・知的な営みを累積したものであり、わずかな知的な営みとしての水滴もすべて知的集合としての大海に注ぎ込んでいる。その意味で、真理に到達するためには、まず自ら現実に触れ、現実を認識しなければならないが、また過去の知的な集積をも学習し、自ら現実に触れ、認識したものをそれらと比較検証しなければならない。まさに個人の認識には実験、経験・実践は不可欠である。いかなる者も現実を正しく認識するためには、実験や経験を通して現実に触れなければならない。しかし、それから得られた認識も絶対的な真理ではない。過去の経験・実験としての歴史的な知的集積や他者の経験・実験としての他者の研究成果と絶えず交渉し、比較検討しなければならない。そして自ら真理に到達していかねばならないのである。まさしくこの営みは私個人の営みであるが、大海につながる「われら」の自由を広げていく営みであり、刻苦奮闘の営みである。このように考えると、「真理はわれらを自由にする」ということは、究極のところ、科学への真摯な取組み以外の何ものでもないのである。

以上は一般的なことがらであり、恐らく誰でも考えていることかもしれない。上記においては、ひとは現実を認識しえるものとして建学の精神を検討してきた。ひとはそれほど容易に現実を認識しえるものではないのであり、私たちの認識については、真理とウソ、個と他者（われわれ）、自由と拘束（不安）との間に多くの間隙が存在しており、自己の認識が必ずしも科学的（真理）とは言えないし、それほど自由でありうるわけではない。そこに科学への謙虚、他者への思いやり、さらに言えば、自ら従事している科学が長い人類の叡智に支えられていると言う自覚、そして科学をする条件の確保、まさに安定と平和を希求する態度がなければならない。多くの自然科学はわれわれの生活を便利にし、また自由をもたらした。しかし、われわれはある時にそれが生態系や環境を破壊していることに気づくのである。はては戦争にさえ関与していることに気づき、呆然とするのである。科学者は、ある時間・空間における真理が別の時代・空間の不自由を生み出すことを自覚しておかなければならない。科学における傲慢と思い上がりほど愚かなものはないし、結局不自由な状態に自らを追いやるのである。また社会現象についても、資本主義の矛盾を克服し、労働者・農民が主人公になった社会主義国がなぜ崩壊したのであろうか。社会主義への移行を歴史的法則と考え、絶対視し、現実の変化を見なかったところに問題があったのではないだろうか。長い目で見れば、人間は大きな代価を払いながら自由を求めて真理を探究しているのであるが、「真理」や「われら」、「自由」という言葉の内容がバラバラに切り離され、時には科学、真理の名の下に非科学的なもの・欺瞞が支配し、人々が不自由に陥ったのではないだろうか。その意味で、「真理はわれらを自由にする」という精神は徹底的に科学的であるとともに、科学する立場・態度を絶えず過去の歴史を鏡に、そして他者を思いやる姿勢でもって検証する態度でなければならない。つまり、個としては徹底的に専門的であるとともに、その研究態度はどこまでも謙虚で、広いことが求められているのである。

建学の精神と教育理念

さて、以上のことを教育理念としてどのように具体化するのか。まず、大学の教育の場においてこの建学の精神を展開するには、それぞれの専門領域において優れた能力を有し、しかも広い見識を持った指導者、教職員を配置しなければならないが（その意味で大学の人事戦略は極めて重要な位置を占めているのであるが)、学生には科学に携わる意味と方法、そして科学的な実験・実習を重視する姿勢、そして自らの研究姿勢を社会的に問い続ける態度を教育しなければならない。その意味で、今回の文学部の改組、国際経営学部の設置に伴ってカリキュラムを改正し、低学年で広く自然と社会について基礎知識を学び、４年間一貫の演習システムを確立し、学生と教員との接触面を拡大し、教員の人格を通して学士力を強化しようとする方向は建学の精神を今日の状況に合わせて具体化させる道筋でないかと考えている。さらに大切なことは、このような過程において教員自身が常に教育力を高め、自己の専門能力をいかに学生に伝達しうるかを検討していかねばならないということである。これは恐らく FD 活動に繋がるのであるが、教員一人ひとりの継続的な自己点検を経ることなしには進行しえない。

とくに今日少子化と大学・学部の増設の結果、高校卒業生が大学にすべて入学する時代にあっては、上記のことは極めて重要で、具体的な状況に応じて多様な形をとらなければならない。その意味で、個性と多様性を踏まえた教育が今日的な課題ではないかと思っている。学生一人ひとりの個性を考え、よい側面を伸ばしていき、そして多様な個性の集まりとして大学が存在していることを教員は認識しておかねばならない。それゆえ、教育の方法も個別的で、多様な形態を取らなければならない。学生の身の丈に教員は身を置き、彼らと問題意識を共有し、専門領域を通して生きる意味と勇気を伝えなければならない。自己の専門研究の人生における重要性を説いていくことなしにいくら知識を与えても、学生は不消化に終わるであろう。とりわけ偏差値で選別され、一定の高い教育水準をもった学生の集まりとしての少数の大学を除いて（それでも、それがゆえにまた別の多くの問題を抱えているのであるが)、多くの私立大学はよほど弾力的で、根気強い教育システムを作らないと、崩壊に向かうであろう。

私は、ある面で建学の精神に魅せられ、別府大学に赴任してきたのであるが、いま極めて難しい局面に陥っていることを自覚している。国の補助金がますます減少し、私立大学の独立採算化が求められ、企業化が進展しているなかで、「真理はわれらを自由にする」という高邁な精神を堅持し、大学を発展させていくことは大変難しいことである。しかしながら、これは、科学者としてやりがいのある仕事である。この困難な仕事をより豊なものにするためには、やはり教職員がいま一度高邁な精神を掲げる意味を理解し、そこに関わって生きている意義を認識することが必要ではないだろうか。素晴らしい建学の精神を掲げる大学に従事し、なんらかの形で寄与していることに誇りを持ちたいものである。しかしながら、独立採算化に伴う企業化を否定しては今

日私立大学の生きる道はないし、それにおぼれていてはまた建学の精神は立たないのである。それを解決する道はまさに現実を徹底的に見つめ、すべての教職員が知恵を出し合い、理想に向かってエネルギーを沸騰させる以外に方法はないのである。

建学の精神と創設者佐藤義詮

聞くところによれば、別府大学の創設者佐藤義詮は文学部の中においてこそ建学の精神が活き活きと展開できると考えていたようであり、先のシンポジウムでも衛藤賢司教授によれば、学生時代に丸いストーブを囲み、学生たちが伸び伸びと談笑し、自由な雰囲気が別府大学にはみなぎっていたとのことである。私は、『司書課程年報』第11号において、佐藤が、戦争と当時の国家の圧力から自由になった、戦後民主主義という状況のもとで自由で開放的な教育の精神を「建学の精神」として具現化したことを述べた。それが女性への教育機会の拡大として別府女子大学の創設にも繋がっている。恐らく、佐藤が文学部にこだわったのはこの自由な精神のもとでの創造の世界への思いがあったからではないだろうか。自由な精神のもとにおいてこそ創造的な仕事が可能となるのである。まさしく文学の世界は創造の世界であり、自由な雰囲気においてこそ成立するものと思われる。

われわれが自由な雰囲気であることは、まさに真理に到達する条件である。その意味で大学は自由でなければならないし、皆で自由を守り、それを拡張しなければならない。さて、文学における真理とは何であろうか。自然科学や経済学などの社会科学のように明快に答える力を持ち合わせていない。創造と言うことはすべての学問に共通するものであるが、文学においてはこの創造性や個性が極めて強いように思われる。むしろ個性的、主観的であることが創造性とさえ感じられる。また後述するように、文学部では技術的というよりも、理念的、理論的な世界が取り扱われているようである。

この個性、創造はなにに繋がっているのであろうか。やはり、私たちの学問（経済学、経営学、会計学など）と同じように、人間の心理や精神のあり方を捜し求め、その現実を認識しようとしているのではないだろうか。たとえ全く異なる、様々な人びとが個性的な研究を続けているとしても、それらはどこかで現実の人間を認識しようとする共通の作業に繋がっているように思われる。これまで社会科学では、人間も機械と同じように法則的に動くものとして、あるいは同一条件では同一に行動する者として認識し、現実を法則として認識してきたのであるが、文学はまさに法則的に動かない個性と法則に左右される人間模様を抉り出し、現実の人間を明らかにし、法則的認識の限界性と同時に法則的な認識の重要性を明らかにしてきたのである。その意味で、宗教もまた人間の精神構造のありようを解明しようとする営みである。道元は、『普勧坐禅儀』の中で「何がなんでも、外に向かって物を逐う心のはたらきの方向をかえて、自己の正体を照らし

出す坐禅修行をすべきです。そうすると、身心が自然に一切の束縛から解放され、本来の面目が現前します。」（『道元集』編集玉城康四郎、筑摩書房1969年刊50ページ）と述べ、坐禅を通して「一切の束縛」から解放される道について述べている。しかし道元はただ主観的な側面を強調しているのではなく、立派な師につく重要性を指摘し、また、「まことに思えば、すぐれたものを愛することのできるほどの者が、当然すぐれたものを愛するのです。葉公が竜を愛したように、彫刻の竜ばかり喜んで、本物の竜が出てきた時気を失うようなことがあってはならないでしょう。」（『前掲書』80ページ）と述べ、やはり事実、現実の中に真実（悟り）を見ようとしていた。

問題はあれこれの現実、客観の認識が真理（科学的）であるかどうかである。しかし、私たちは容易くそれを判定する基準を持っていない。おそらく歴史や長い経験・実験がその基準であるかと思われる。その意味で、大学は現実・客観を認識しようとするあらゆる努力と方法が競合し、併存している世界であり、また真理とウソ・虚偽(もっとも結果としてそうなるのであるが)が学問間で、また同一学問内で併存し、科学に向かって競争している空間である。それゆえ、如何なる研究や学問も大学では許容されるし、排斥されてはならない。ただ、真理に向かい、われわれを自由にするという共通の信念を大学に生活するものは共有しなければならず、大学内で生活するわれわれを拘束し、不自由にするような、当初からウソ・虚偽と分かるような事柄を弄ぶような研究や教育は許容されないし、当然排斥されるべきである。このように見ると、大学では、私たちはある条件において絶対的であるような真理に向かって努力しているのであるが、条件が変わればやはりその認識が相対的であるから、自己の認識を絶えず総合的な視点から検討しなければならない。大学はそのように学問を総合化する場であり、そうであるからこそ「真理はわれらを自由にする」という建学の精神が意味を持ってくるのである。

真理は、以上のような意味で、非常に多重な層をなしており、間接的・直接的な認識の集合なのである。真理の探究は哲学においてもっとも明確に取り扱われ、それに隣接する文学、思想、芸術などが技術的な学問よりも真理に最も近いものであると一般に考えられてきたようである。私たちは直線的でなく、紆余曲折を繰り広げながら真理に到達するのである。その到達は個人のあり方や学問領域のあり方において様々である。ただ、共通していることは、その営みは創造的であり、現実を概念化するものであり、自由の雰囲気の中で行われ、時間空間的に相互に繋がり、現実の客観性を認識するものであり、多くの人びとを自由にするものである。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』の冒頭において、「いかなる技術もいかなる研究も、同じくまた、いかなる実践も選択も、ことごとく何らかの善きものもの（アガトン）を追求していると考えられる。」（『世界の大思想２、アリストテレスニコマコス倫理学』高田三郎訳、河出書房、1966年刊）と述べており、彼の「善きもの」はまさに真理に通じており、それは私の大好きなつぎの言葉に結び付いている。「真理も、親しきひとびとも、ともにわれわれにとって愛すべきものではある

が、真理に対してより多く敬意を払うことこそ敬虔な態度なのである。」（『前掲書』21ページ）真理の前でいかなる者も平等で、敬虔でなければならない。これが大学の本来の姿であり、大学に生きるものの根本精神でなければならない。道元もまた、『学道用心集』のなかで、「たとい古代中国きっての美女といわれる毛嬙、西施ほどの美しく妙なる顔ばせを見ても、風をまつ間の朝霧の、ちらりと眼に入ったとおなじです。目や、耳などの感覚の対象にひき回されて自由を失うことがなくなれば、自然に菩薩心の理致かなうものでしょう。」（『前掲書』60ページ）と述べ、真理（悟り）に到達する上での愛欲、利欲、権力欲のはかなさを指摘している。真理をえると言うことはこれほど大変なことなのである。

国際経営学部の新設と建学の精神

先に述べたことと関連するのであるが、「真理はわれらを自由にする」と言う建学の精神は文学部においてこそ意味あり、国際経営学部はこの方向に反するものであると考える見解が見受けられる。この意見の背景には、真理は理論的、抽象的なもので、技術的、実利的なものとは無関係であるという考えが横たわっているのかもしれない。このような見解に照らせば、まさに、国際経営学部は会計・経営などの極めて技術的、実利的な知識・方法を取り扱っており、真理の探究・科学から遠いところにあるように思われる。私も40数年会計を研究教育してきたのであるが、学生の頃から自分は技術、実学としての会計を学んでいると考えてきた。しかしながら、最近では、研究者として会計の歴史、経済との関係、諸外国との比較研究などを通してこれほど科学の対象として面白いものはないと考えるようになっている。九州大学を退官する前に一冊の著書に纏めたのであるが、科学として会計を研究する意味を会得し、科学としての会計学研究に確信を得たのである。日本では恐らく私ら少数を除いてほとんどの人は会計を実学（単なる技術）として学生に教育しているのが実情である。しかしながら、私は、ニュージーランドのオタゴ大学で会計学の教授、ロジャー・ウイレットに出会い、かれの深い見識と会計を超えた非常に広い知識(哲学、数学、歴史、国際事情等)を知り、英国系プロフェッサーの質の高さに驚かされた。まさに彼は会計を科学として研究教育していたのである。また、ドイツのフランクフルト大学で講演をした時、謝礼の意味を込めて、世界的な国際会計学の権威、オーデルハイデ教授は、私を自宅に招待し、奥さんの手作り料理をまえに美味しいワインを片手に、私が暇を乞うまで会計の可視化と非可視化について哲学的な視点から私に語りかけていたのである。私がどのようなことを日本でしているのか、私の家庭についてなど全く無頓着であった。私はその時、日本から来た、同じことを研究している友人に出会った機会にお互いに意見を交換しようとする学者の姿を見たのである。これらの経験は私を非常に勇気づけてくれるものであったし、私はまた自ら歩んできた研究の道に間違いがなかったことを教えられた。

世の中に如何に瑣末なものでも科学の対象となりえないものはない。国際経営学部の設置について話を戻そう。日本の社会では、いまなお、読み書き、算盤を実学(社会に役に立ち、生産的)とし、漢詩・和歌・絵画等文学的な営みを虚学（社会に価値を生み出さず、非生産的なもの）とした福沢諭吉の言葉が支配しているようである。ドイツ、アメリカでも、経営学・会計学は長い間金儲けの学問と考えられ、経営経済学（個別経済学）や近代会計学というように経済学や近代という名前を借りて、20世紀初頭にやっと学問（理論的なもの）として大学で認められるようになった。日本はそれよりさらに遅れ、大学では「学問領域」と一般的に認められるようになるのは1960年代の高度経済成長期以降である。当時すでに別府大学を開設し、建学の精神を高々と掲げ、国文学科・英文学科を重視し、そこに建学の精神を展開しようとした創設者佐藤義詮の思いは痛いほど理解できるのである。しかしながら、いま現実に動いている世界を見た場合、美術も商業デザインのように経営と緊密に結び付いているし、文学も私の会計研究よりも技術的で、実利的であり、文学の領域において虚学（理論的）というものから遠いものさえ沢山見られるのである。福沢が当時意図したものはよく理解できるのであるが、私たちが学ぶ対象は、程度の差こそあれ、福沢流に言うなれば、虚学（理論的、非生産的）であり、また実学（技術的、生産的）なのである。すでに述べてきたように、大学では、すべての現象が研究教育の対象となり、現実・客観への科学的な認識への営みが行われている。理論的なものも技術的なものも、それが現実に存在し、人間社会に結び付いている限り、その認識行為は真理に結び付き、「われらを自由にする」営みなのである。もし国際経営を技術とし、その真理への営みを拒否し、つまり科学の対象として考えない風潮があるとするならば、現実には国際経営が非常に大きな社会的な広がりを持って私たちの生活に影響を与えているのであるから、なおさらそれを科学的に研究教育し、真に現実に役立てる学部がいま求められているのではないだろうか。確かに別府大学の財政・経営状況を考えた場合、時代の流れのなかで社会的なニーズに対応した学部を創る必要性が感じられるけれども、その時代と社会を考え、国際経営の領域において真に建学の精神を展開することは科学者としてのさらに大きな使命ではないだろうか。私は、このたびの新学部に私の永年の研究教育の思いを投入し、招聘する教員もこの立場から選び、思いを彼らに語りかけてきた。国際経営学部の新設は建学の精神の現代的な展開であり、そのより豊かな今日的な発展への挑戦なのである。

建学の精神を具体化するということは、ある抽象的な理念や理想にそれを閉じ込めることではなく、現実・歴史の中にそれを活き活きしたものにすることであり、別府大学に従事するもの、学生、卒業生、父兄、そして地域の人びとがその精神を誇りに思えるようにすることである。建学の精神を小さな宝箱に大切にしまい込むのではなく、現代の生きた歴史の中で絶えず検証し、発展させなければならない。昨年５月に学校法人別府大学は100周年を迎えたのであるが、つぎ

の百年においてこの建学の精神をどのように展開するかは、その基礎つくりに関わる、いま別府大学に従事しているものの大きな責務である。

まとめ

以上、建学の精神「真理はわれらを自由にする」について思うままに述べたが、要は、私たち教職員が自ら担っている業務を、それが研究教育活動であれ、事務活動であれ、学生支援活動であれ、建学の精神に照らして捉えなおし、より豊かな教育研究を学生に提供することである。その意味で、国際経営学部の設置について取り上げたが、それには特別な意味があるわけでなく、上記のことはすべてに当てはまることである。別府大学に生活するものすべてが建学の精神を胸に抱き、どこまでも科学に謙虚で、学生に真摯に対応するならば、恐らく日本でもユニークな大学になるものと確信している。

（本稿の作成に際して、資料提供では文学部後藤重巳教授、佐藤瑠威教授には大変お世話になった。また文学部浅野則子教授、企画室室長盛本功爾郎氏に貴重なご意見をたまわった。ここに謝意を表したい。）